

石田城五島氏庭園の実測調査と修理

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

石田城は五島列島を支配した五島藩の本拠であり、福江島の東岸、福江市にある。1万2千石の小藩である五島藩は、この地に陣屋を置いていたが幕末にいたり海岸防備のためにこれを拡張し、堀や石垣を備えた城郭とした。北・東・南の三方を海に囲まれた海城であり、五島氏庭園はその二の丸に藩主五島盛成が営んだ隠居所である書院に東面する池泉庭である。書院とともに安政3年（1856）から5年にかけて築かれている。書院・庭園とともに、この屋敷の一郭を囲む堀や門、石垣がよく残り、石田城の中で藩政期の姿をそのままに伝える唯一の場所となっており、県立五島高等学校が建つ本丸を含めて、長崎県の史跡に指定されている。

池は東西45m、南北30mほどの大きな水面を有し、中島が3ヶ所にある。これらの護岸石組が全体に緩んできたため、1989年に福江市がその保存策を含めた調査を当研究所に依頼してきた。現況図もないことから、まず修理前の実測を行うべく、これを敷地図と湛水状態の写真から約一週間の作業と見積った。実測に際しては池を干す必要があり、我々は池の浸漬後に現地に赴いた（第1回実測調査、1989年12月、高瀬・安田・本中・小野）。ところが、我々が考えていた以上に池が深く、その護岸は石を重ねて積み上げたまさに石積みであり、高さも1.4～2.0m前後もあった（写真）。通常、わが国の園池の護岸は一石でおさえるのを基本とし、重ねることがあってもせいぜい2、3石止まりである。本庭園の場合、少ない所で5石、多いところでは10石以上も重ねており、この石積の裾にはさらに木杭を打ち込み、基底部の石のすべり出しを止めている。結局、予定の一週間では半分程度しか実測できず、1990年度に残りを実測した（第2回実測調査、1990年11月、高瀬・本中・小野・杉山）。

実測の後、1990年度には護岸石組の修理も行った。水深の深い池を作るために、前述のように石を積み重ねた護岸を築いているのであるが、これらの石の自重が災いし護岸の全体的な沈

下を招いたものと思われる。これを根本的に修理するには一旦石積をすべて解体し、基盤部を補強した上で再度積み上げることが必要である。一方、護岸の沈下は今に始まったわけではなく、築造当初から徐々に進行してきたものと思われる。護岸の裾に沿って打ち並べられた杭と、その内側に詰め込まれた石は築造当初からのものではなく、ある時点で護岩を補強し、崩壊を防ぐためになさ

護岸石積み（書院座敷から）

れた施設である可能性もある。以上のような護岸の現状であり、予算的にも根本的な修理は対応できない状況にあった。したがって、今回の修理ではこのまま放置できない危険な6ヶ所は解体・積直すこととし、残る大部分の護岸はこれ以上緩まないよう、現状保存措置を加えるにとどめた。具体的には護岸石組裏込め部の目詰まりを防ぎ、排水をよくすることと、周辺から池に流れ込む雨水が護岸の裏側に入らないように、以下の保護策を行った。護岸の沈下により空洞化している部分に裏込め栗石を補充するとともに、沈下した護岸と周囲の地盤との間に生じているすきまは石灰を加えた粘土を詰めて防水し、裏込めに水と共に土砂が流入するのを防いだ。また、護岸の裾を押さえている木杭の腐朽部や不足部には新たに木杭を打ち込んだ。

護岸修理と並行して、池の導水の復元と繁茂した植栽の整理を行った。池への導水は屋敷西側の堀水を水路で導き、西岸の滝口から池へ落としていたと伝えられるが、現状では堀水の水位が下がり導水できない。幸い、福江市が堀水の補給のために設けた井戸が近くにあり、ポンプアップされたこの水をパイプで導き、石組された本来の導水路の途中に流し込むことによって復元した。このために石の沈下や抜け落ちのある水路について、不陸修正、不足石の補充を行い、目地をソイルセメントにて防水し復旧した。

来年度（1991）に修復後の石組の実測を行い、今回の一連の修理整備事業の報告書を作成する予定である。

（高瀬・本中・小野）